

おくりびと

——映画文学人生論

参考：青木新門	『納棺夫日記』桂書房 (1993年)		
監督：滝田洋二郎	(1989年)	脚本：小山薫堂	
出演：小林大悟	本木雅弘	撮影：浜田毅	
小林美香	広末涼子	音楽：久石譲	
佐々木生栄	山崎努	山下ツヤ子	吉行和子
上村百合子	余貴美子	平田正吉	笹野高史

きみの天職だ、この仕事は

映画『おくりびと』を観て、納棺夫という職業があることを知った。遺体をきれいにし、旅立ちの衣装を着せて、棺に納める仕事である。

主人公（本木雅弘）はオーケストラのチェロ奏者から納棺夫に転職した。はた目にはチェロ奏者のほうがよさそうな職業に思えるが、所属オーケストラが解散してしまったから仕方がない。新聞の求人広告に、「旅立ちのお手伝いをする仕事」とあったので、旅行代理店だと思って応募したら即採用。それが納棺の仕事だったという訳だ。

「きみの天職だ、この仕事は」と、社長（山崎努）にははげまされたが、それまではチェロ奏者が天職だと思いついていたので、すぐには頭がきりかわらない。仕事の内容は妻（広末涼子）にも言えなかった。友人には「こんな仕事をして恥ずかしいとは思わないのか」とののしられた。

職業に貴賤はない。とはいっても、列車へ飛び込み自殺をしたバラバラの轢死体の肉片を拾って歩いたり、腐乱してウジがたかっている遺体をきれいにし、湯灌・納棺するのは楽ではない。

それでも、仕事を続けているうちに、主人公の意識は納棺の仕事に誇りを感じるように変わっていく。チェロ奏者としては、もっと早く自分の才能の限界に気づけばよかったとさえ思う。

そして、最後には子供の頃、妻子を捨てて出奔した父が老人ホームで死んだという知らせを受け



おくりびと
Original Soundtrack
音楽: 久石 譲

おくりびと

映画文学人生論

て、父の遺体の納棺をする。それを見守る妻は今や、その仕事を理解するようになっていた。彼女の胎内には、二人の愛の結晶が芽ばえているというのが感動的なクライマックスだ。

この映画には原作はないことになっているが、青木新門『納棺夫日記』が原作である。本木雅弘が読んで、感銘を受け、いったんは作者から映画化OKをとりつけたが、脚本を見せると、「やるなら、全く別の作品としてやってほしい」と言われてしまった。作者の宗教観が反映されていないなどの理由による。

そのため、タイトルを『おくりびと』とした。脚本も『納棺夫日記』とは内容が違う。主人公の故郷を富山ではなく、山形としているし、最後に父の遺体の納棺をするというのも脚本家のフィクションだ。

『納棺夫日記』の死生観は、北陸地方の冬によく降る「みぞれ」に象徴されている。「みぞれ」という言葉は英語には見当たらない。SLEETは凍雨という意味で、雨とも雪ともつかないみぞれ現象ではない。生死のとらえかたも西洋と東洋ではちがう。西洋の思想では生か死かであって、「生死」というとらえ方はないが、東洋の思想、特に仏教は生死を一体としてとらえてきたと原作者の青木新門はいう。

行き行きてわが心にもみぞれ降る